

第7回 「日本語大賞」

わたし つか ことば
テーマ「私が使いたい言葉」



一般の部 文部科学大臣賞 受賞作品

田んぼはおしゃれさん

岐阜県

伊藤 喜治

田んぼはおしゃれさん

岐阜県

伊藤 喜治（いとう・よしはる）

「田んぼはおしゃれさんやでな。」この言葉を初めて耳にする人は、一体なんのこと？と首を傾げると思うが、これは元気だった頃のお袋が相手を諭すためにいつも口にしていた言葉だ。

農家の長男として生まれた私は、小学校へ入学するとすぐに田畑に出て手伝いをするようになった。当時は今のよう機械化されておらず農繁期が多忙で人手が足りなかったことから、当然のように小学生の坊主でも一人前の成果を期待され仕事に駆り出されたためである。だから隣近所の同級生も田んぼで両親とともに仕事をする姿をあちらこちらで見かけた。

しかし、こっちはそんな両親の期待など迷惑な話で、当然泣きべそをかきながら手伝っていたことを思い出す。勿論、一分でも早く終わって遊びに行きたい一心であったことも事実だったが。

真夏の炎天下で除草機を押しして田んぼの草取りをするのは大変だ。

これは、植え付けた苗の株間の表土を攪拌して耕すのと除草を兼ねて行う作業で、先端に浮力を得るための船と、その後ろに回転する水車状の羽がついた器具を手で押して行う。そんな除草機を使つての作業のことを親しみを込めて「ごま回し」と呼んでいたが、子供にはそれがうまく扱えず、ぬかるむ足元を気にしながら重い荷車の後押しをしているように感じられた。広い大きな田んぼでの作業は果てしなく続いてゆくようで、幼かった私には嫌で嫌で堪らない仕事だった。

作業は単調だが、丁寧にゆっくりと除草機を押ししてゆかないと土がうまく反転してくれない。そこを急ぎ足で時には走るようにその除草機を押しに行けば、結果は誰が見ても一目瞭然である。

そんな田んぼでの作業も、あぜ道に座って一服するのは楽しみだった。

一服とは休憩することで、親父がタバコをくゆらせる隣でお袋はお茶を注ぎながら私に向かつてこう言った。

「喜治、仕事はきちんとやらんとあかん。よその人がお前の仕事をした跡を見て、いい加減な仕事をしとるなと笑いなさる。田んぼはおしゃれさんやでな。きれいにしとかな。」先ほどの除草作業を見て、お袋が汗を拭きながら諭すように言ったのが、この言葉だ。冷たい北風の吹く田んぼで手伝った「麦踏み」でも、お袋から言われたことがある。

稲の取り入れが終わって、田んぼには麦を植え付けた。一斉に青い芽を出した麦を何故か人が踏みつけてゆくの「麦踏み」で、両足を細かく動かして隙間なく踏みつけてゆく

作業はバランスと体重移動時のタイミングが要求され、簡単そうに見えるが奥の深い仕事である。

「ここでも私の仕事の仕方を見ながらお袋から言われた。」

「田んぼはおしゃれさんやといつも言ってるやろ。きちんと踏んでおかないとみっともないし麦が沢山獲れないでな。」

とにかく早く仕事を終わらせたかった。

そのために、手抜きならぬ足抜きで仕事をしたために、踏んでないところは麦の芽がしっかりと立ったままになっており、いくらなんでもこれではお世辞にも「麦踏み」しました、とは言えない。

田んぼは耕地整理によつて大型の機械が導入され、個人で耕作する人はほとんどいなくなり、営農組合がその仕事を請け負うようになった。

定年を過ぎてから「猫のひたい」程の畑を耕す機会も増えた。

現役で仕事をしている時は土曜、日曜の出勤や夜勤があり、二度の単身赴任などで畑仕事はそのほとんどを妻に任せきりになっていたが、ある日ひとりで畑に出て仕事をしていると、愛用の乳母車を押しながらお袋が様子を見に来た。

元気な頃は畑の仕事にも精を出していたが、ここ数年前からは我々に任せて自宅にこもることが多くなったのに、今日は何を思っただか畑が気になったらしく顔を出した。

「喜治、今起こした畝の端のところをきれいに上げておかないとみっともない。」

やれやれ、還暦も過ぎた息子に、九十歳のお袋から相変わらずの「教育的指導」だ。

だが、少しも腹が立たないし笑って聞き流しながら鋤を動かして畝を整える。

「畑もおしゃれさんやでな、きちんとしてかんと。」

いつもより遅い梅雨入りのニュースを聞きながら、愛犬との散歩の道すがら、すっかり田植えの終わった見渡す限りの緑の絨毯を見て、二年前に天寿を全うしたお袋を思い出している。

これがお袋の言っていた「おしゃれな田んぼ」なんだな。

物言わぬ田畑だって、きれいにしたいと欲しているんだ。

お袋から猛暑の田んぼで言われた言葉も、厳寒の田んぼで言われた言葉もすっかり耳に残っている。

幼い子供を叱りつける言葉でもなく、言い聞かせ諭すために言われたあの言葉。

「田んぼはおしゃれさんやでな。」

社会に出てこの言葉が意味することが分かった気がした。

「田んぼ」は会社、「おしゃれさん」は周囲に気配りをしながら一生懸命仕事をする事。

お陰で四十六年間の会社勤めも大過なく終えることができた。

そんな優しい響きの日本語をこれからは我々が上手に使って子供達に教え、伝えてゆく任務があると思っっている。

当たり前だった「親子の信頼」そして「親子の絆」も、忙しく過ぎてゆく時間の前に影が薄れてゆくようだ。

だが、日常の会話の中で心に響く優しい日本語がきつとあるはずだ。

そしてそれが親子の信頼・絆に結びつくと思いたい。

亡くなったお袋は色々面白い話を聞かせてくれたが、あのおしゃれさんの話は「田んぼ」も「畑」も命あるものとして扱えば自然はそれに答えてくれるし、環境を整えてやれば自然を守るということにも繋がっていることを学んだ。

近所の田んぼで蛭が飛び交う様子が報じられた。

おしゃれな田んぼが一層華やかになり、これも自然が帰ってきた証と嬉しくなった。

「田んぼはおしゃれさんやでな。」

もう一度噛み締めながら繰り返し口に出すと、諭すように笑顔で話してくれたお袋の顔が浮かんでくる。